

装いの翼

いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子

2025年10月31日(金)～2026年2月1日(日)

ちひろ美術館・東京 展示室1・2・3・4

主催：ちひろ美術館

協力：岡上淑子、岡上容士、宮崎治、行司千絵、岩波書店、鈴木恵子、
東京国立近代美術館、東洋英和女学院史料室、The Third Gallery Aya

装うことを喜びとしながら、多感な時期を戦禍のなかで過ごした三人の女性。
それぞれの表現で道を切り拓き、自由と美を求めた。

いわさきちひろ(1918-1974)、茨木のり子(1926-2006)、岡上淑子(1928-)は、第二次世界大戦後、それぞれ、絵本画家、詩人、美術作家となり、美しいものへ誠実にまなざしを向けました。本展では、2025年9月刊行の行司千絵・著『装いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)を起点として、「装い」をテーマに3人の女性作家の素顔に迫ります。それぞれの作品とことば、愛用の品や写真などを展示し、三者三様の美意識や生き方と、自由と平和を求める共通の思いを浮き彫りにします。



いわさきちひろ アトリエにて
1973年4月



茨木のり子
1969年 撮影：谷川俊太郎



岡上淑子

いわさきちひろ Chihiro Iwasaki (1918-1974)

画家。^{たけ ふ}1918(大正7)年、福井県武生(現・えちぜん 越前市)に生まれ、東京で育つ。東京府立第六高等女学校卒。藤原行成流の書を学び、絵は岡田三郎助、中谷泰、丸木俊に師事。1950年松本善明と結婚。翌年長男猛誕生。子どもを生涯のテーマとして描く。絵本に『おふろでちゃぶちゃぶ』(童心社)、『あめのひのるすばん』『ことりのくるひ』(至光社)『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)など。

茨木のり子 Noriko Ibaragi (1926-2006)

詩人。1926(大正15)年、大阪で生まれ、6歳のときに医師である父の転勤により愛知県西尾町(現・西尾市)へ移住。帝国女子医学薬学専門学校(現・東邦大学薬学部)卒業。24歳で詩作活動を開始し、川崎洋と同人「櫂」を結成。谷川俊太郎・岸田衿子・大岡信らとともに詩壇を牽引する。詩集に『対話』(不知火社)、『見えない配達夫』(飯塚書店)、『自分の感受性くらい』(花神社)、『倚りかからず』(筑摩書房)など。

岡上淑子 Toshiko Okanoue (1928-)

美術作家。1928(昭和3)年、高知県生まれ。文化学院デザイン科卒業。22歳から約7年間独自にコラージュを制作。瀧口修造に見出され、1953年、タケミヤ画廊で初の個展。同年、「抽象と幻想」展(東京国立近代美術館)にも出品。2000年、44年ぶりの個展「岡上淑子フォト・コラージュ—夢のしづく—」開催後、国内外で作品を展覧。2018年、初回顧展「岡上淑子コラージュ展—はるかな旅」を高知県立美術館で開催。



展覧会の
見どころ

I

いわさきちひろ

いわさきちひろは、大正デモクラシーの機運が高まる東京で、進取の気風に富んだ家庭に育ち、恵まれた幼少期に美意識を育みました。第二次世界大戦後、画家となり、自身の幼少期の想い出を重ねて、子どもを描きます。趣向を凝らした子どもたちの装いには、子どもを慈しむちひろのまなざしが映し出されています。ちひろの絵とともに、彼女が手づくりした可憐なワンピースや、懇意にしていたブティックであつらえたコートなども展示します。



1 母・文江の手づくりワンピースを着た
8歳のちひろ(右端)と妹たち1926年



2 いわさきちひろ 白いマフラーをした緑の帽子の少女 1971年



3 いわさきちひろ バラと少女 1966年



4 いわさきちひろ
枯れ葉と赤い服の少女 1971年



5 いわさきちひろ 指人形で遊ぶ子どもたち 1966年



旅先での装い／スペイン、トレドの
道端で 1966年



6 いわさきちひろ
トレド 石畳の道を歩く女
1966年4月7日

ちひろが懇意にしていた
ブティック、ルネであ
つらえたコート
撮影: 大塚愛



7 いわさきちひろ 赤い毛糸帽の女の子
『ゆきのひのたんじょうび』(至光社)より
1972年



公益財団法人いわさきちひろ記念事業団
ちひろ美術館・東京

展覧会の見どころ II

茨木のり子

茨木のり子は、戦後の混乱期を生きた女性の心情を代弁する詩から、「現代詩の長女」とも称され、気骨のある詩人として知られています。家庭では、プロ顔負けの料理をつくり、住まいを心地よく整え、洋服を自作し、幼少期から培われた審美眼で買い物を楽しみました。のり子の詩と愛用の品から、そのしなやかな感性の源泉を探ります。のり子の没後に発見され、発表された最愛の夫への想いをつづった詩を収めた「Yの箱」も展示します。



8 10歳の誕生日を迎えたのり子 1936年

9 茨木のり子「泉」自筆原稿 個人蔵
撮影：小畑雄嗣 『茨木のり子の家』（平凡社 2010年）より

わたしのなかで
咲いていた
ラベンダーのようなものは
みんなあなたにさしあげました
だからもう薰るものはなにひとつない
わたしのなかで
溢れていた
泉のようなものは
あなたが息絶えたとき いつぺんに噴きあげて
今はもう枯れ枯れ だからもう 涙一滴こぼれない
ふたたびお逢いできたとき
また薰るのでしょうか 五月の野のように
また溢れるのでしょうか ルルドの泉のように

泉

茨木のり子



吉田の海でくつろぐのり子と夫・安信



10 スカーフ使いも得意としたのり子

撮影：吉崎貴幸
自宅の家事室に配置されたミシン

撮影：行司千絵



撮影：吉崎貴幸

のり子愛用のアクセサリー。宝石ではなく、陶製のブローチや、大ぶりな民族調のビーズのネックレスなどを好んだ。



11 ワンピースにクロッシュを合わせた装いで 1956年

展覧会の見どころ III

岡上淑子

岡上淑子は、1950年頃から独自にコラージュ作品の制作を始めました。美術家・美術評論家で詩人の瀧口修造に見いだされ、7年ほど美術家として活動をした後、長らく美術の世界とは距離を置いていました。2000年に再び注目を集めてから、現在に至るまで、国内外で作品が展示され、その先駆性が再評価されています。1950年代のモードを色濃く映した淑子のコラージュ作品とともに、ことばや書簡を展示し、彼女の美の源泉に迫ります。



12 小学生の淑子 母の千鶴子と

「海のレダ」は私の一番好きな作品です。女人は生れながらに順応性を与えられているといいますが、それでも何かに変っていく時にはやはり苦しみます。そういう女人の苦悩をいいたかったのです。

岡上淑子

夢のしづく『美術手帖』(美術出版社)
1953年3月号より

13 岡上淑子 海のレダ 1952年 個人蔵
©OKANOUE Toshiko Courtesy of The Third Gallery Aya14 岡上淑子 彷徨 1956年 個人蔵
©OKANOUE Toshiko Courtesy of The Third Gallery Aya15 岡上淑子 ポスター 1950年
東京国立近代美術館蔵16 岡上淑子 終曲の午後 1952年
東京国立近代美術館蔵

展覧会の
見どころ IV

3人の軌跡

一見、無関係のようでいて、不思議と共通点の多い、ちひろ、のり子、淑子。『『いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)著者の行司千絵のことばから、3人が青春時代に体験した戦争と、敗戦後に彼女たちが求めた美と自由の軌跡をたどります。

このころ、のり子の唯一の楽しみは
星空を見ることだった。
戦禍のなかに残された
たったひとつの美と感じた。



茨木のり子17歳のとき。
帝国女子医学薬学専門学校
(現・東邦大学薬学部) 入学記念。1943年



いわさきちひろ(左) 25歳のとき。
妹・世史子と伊勢丹にて。
1944年4月28日



右の写真で着ているワンピース
撮影:前田景



いわさきちひろ (左) 20歳のとき。映画「オーケストラの少女」の衣装を真似て手づくりしたワンピースを着て、妹・世史子と。1939年4月



東洋永和女学校(現・東洋英和女学院中学部)の
制服を着た岡上淑子 1940年代前半

敗戦を迎えた日、
淑子は十七歳だった。
それから八十年が過ぎても、
戦争を想起させる
黒色のフレームを避けるのは、
静寂な一隅の尊さを今も
大切にしているからかもしれない。

文章はすべて行司千絵

出展作品数

いわさきちひろ

作品約 35 点と資料

茨木のり子

自筆原稿ほか資料約 40 点

岡上淑子

作品 8 点と資料

行司 千絵 Chie Gyoji (1970-)

奈良市生まれ。同志社女子大学卒業。京都新聞文化部記者。趣味は旅と洋裁。独学で洋裁を習得し、自身の普段着や母、友人・知人の服を縫っている。瀬戸内寂聴や志村ふくみなど、3~93歳の約80人に服をつくった。著書に『おうちのふく一世界で1着の服』(フォイル)、『服のはなしー着たり、縫つたり、考えたり』(岩波書店)など。

お問い合わせ

広報担当 北村・原島・松方

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2
TEL.03-3995-0772 (業務用) FAX 03-3995-0680
TEL.03-3995-0612 (代表)
E-mail : publicity@chihiro.or.jp



公益財団法人いわさきちひろ記念事業団

ちひろ美術館・東京

chihiro.jp



*各イベントの詳細は公式サイトに決まり次第掲載します

展示関連イベント

行司千絵 特別ギャラリートーク

日時：10月31日(金) 14:00～14:30

講師：行司千絵(新聞記者、『装いの翼』著者)

聞き手：当館学芸員

参加費：無料(入館料別)／申し込み：不要

本展企画の起点となった書籍『装いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店)の著者・行司千絵が取材や執筆を通して感じたことや展覧会の見どころをお話しします。

トークイベント

甥夫婦が語る素顔の茨木のり子

日時：11月22日(土) 14:00～15:30

講師：宮崎治(茨木のり子甥)、薰(甥の妻)

聞き手：行司千絵(新聞記者、『装いの翼』著者)

会場：【ちひろ美術館・東京】／定員：40名／参加費1200円(入館料別)

【オンライン】定員100名／参加費900円

申し込み：要事前予約(10/22(水)より公式サイト、TELにて)

『茨木のり子全詩集 新版』(岩波書店・2025年9月刊行)の編者であり、茨木のり子の甥・宮崎治とその妻・薰が、詩人の素顔とその魅力について語ります。

松本猛ギャラリートーク

日時：12月21日(日) 14:00～14:40

参加費：無料(入館料別)／申し込み：不要

いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートーク。展示作品を見ながら、母・ちひろとの思い出や展示の見どころなどをお話しします。

新刊／展示関連書籍

「装いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子」
行司 千絵・著／岩波書店
定価2,640円(本体2,400円+税10%)
2025年9月26日発売



展示関連商品

老舗京菓子店「塩芳軒」(京都市上京区)が手がける展覧会オリジナルのお干菓子「装いの翼」をミュージアムショップで販売いたします。

絵本カフェでは、カフェ限定フレーバーのお干菓子「装いの翼」と塩芳軒オリジナルの御煎茶のセットも楽しめます。



オリジナル干菓子 400円(+税)

※開館情報、会期、展示名、イベント内容などは予告なく変更する可能性があります。

会期中のイベント

わらべうたあそび

日時：11月1日(土) 11:00～11:40

講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表・はとさん文庫主宰)

対象：0～2歳児と保護者／定員：8組16名

参加費：無料(入館料別)

申し込み：要事前予約(10/1(水)より公式サイト、TELにて)

リズムにあわせて体を動かしたり、声を出して歌ったりして、物語への入り口となる「わらべうた」を親子で楽しみます。



いわさきちひろ
絵本をめくるあかちゃん
1965年

成人の日特典

2026年1月3日(土)～12日(月・祝)まで、新成人の方は無料でご入館いただけます。

ギャラリートーク

日時：毎月第1・3土曜日 14:00～14:30

参加費：無料(入館料別)／申し込み：不要

展覧会の見どころや展示作品について担当学芸員が解説をします。

絵本のじかん

日時：毎月第2・4土曜日 11:00～11:30

参加費：無料(入館料別)／申し込み：不要

協力：NCBN(なります子どもと本ネットワーク)

季節や展示にあわせ、テーマにそった絵本の読み聞かせを行います。あかちゃんから大人まで、参加自由のイベントです。

展覧会基本情報

展覧会名 装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子

会期 2025年10月31日(金)～2026年2月1日(日)

※会期は予告なく変更になる場合があります。

○開館時間＝10:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

○休館日＝月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)、

年末年始(12月28日～1月2日)

入館料 大人1200円／高校生・18歳以下無料／団体(有料入館者10名以上)、65歳以上、学生の方は900円／障害者手帳ご提示の方とその介添えの方(1名)は無料／年間パスポート3000円

交通 ○電車の場合＝西武新宿線上井草駅下車徒歩7分

○バスの場合＝JR中央線荻窪駅より西武バス石神井公園駅行き(荻14)上井草駅入口下車徒歩5分／西武池袋線

石神井公園駅より西武バス荻窪駅行き(荻14)上井草駅入口下車徒歩5分